事例３：小学校　通級による指導を受けているＣさん（６年生）

通級による指導担当教員と通常の学級の担任が連携し、個別の指導計画を基に支援を継続しながら個別の教育支援計画を作成し、中学校に引き継いだ事例です。通級による指導担当教員の専門性を生かした研修会の実施を進めるとともに、支援会議において個別の教育支援計画の作成をすることで、医療機関と連携して支援が行えたり、円滑な中学校への引継ぎにつながったりしました。

＜生徒の実態＞
○　小学６年生男子で、通常の学級に在籍しています。
○　学習障害通級指導教室（自校）で入学時より継続して支援を受けています。
○　小学１年生のときに広汎性発達障害の診断を受けています。
○　算数が得意で、手順に従って筆算等の計算を正確にすることができます。
○　力の入れ具合を調整しにくく、協調運動が苦手です。
○　周りの刺激や状況の変化に過剰に反応し、集中できにくいところがあります。
○　相手の気持ちや状況を理解することが苦手です。

１．個別の教育支援計画作成までの経緯

校内支援体制

☆　**生徒指導研修と合同**で、特別支援教育に関する校内研修会を開催し、**校内の教職員の理解・啓発**に努めています。
☆　インシデント・プロセス法等を活用して事例の検討を行っています。

○　特別支援教育に関する校内研修会を学期に１回開催しています。生徒指導研修と合同で行うことで、支援の必要な児童について共通理解を図っています。
○　コーディネーターと通級による指導担当教員が企画し、事例検討会を行っています。その際、資料等を用意しなくても簡易に情報交換できるように**インシデント・プロセス法***等を活用しています。**（＊コラム参照）**

ポイント：研修会等の時間確保が課題となっている学校も多いと思います。生徒指導などの他の研修会と合同で行ったり、事例検討会においてインシデント・プロセス法等を活用したりするなど、学校の実情に合わせて取り組みやすい方法を考えてみましょう。

保護者全体への理解・啓発

☆　「学校だより」や「通級指導教室だより」等を活用して、特別支援教育について**保護者の理解・啓発**に努めています。
☆　**ＰＴＡ総会でコーディネーター等を紹介**し、相談しやすい体制を作っています。

○　「学校だより」に特別支援教育について取り上げ、全保護者に知らせるようにしました。
○　通級による指導の具体的な取組に関するリーフレットや「通級指導教室だより」を配付して、特別支援教育の取組について理解・啓発を図っています。
○　ＰＴＡ総会でコーディネーターや通級による指導担当教員を紹介し、学習や生活について気軽に相談してほしいことを伝えました。

ポイント：コーディネーターの存在は知っていても、誰が担当しているか知らない保護者もいます。事前に、担当者の名前や相談方法を知らせておくことは大切なことです。

Ｃさんへの支援

☆　担任は**通級による指導担当教員と連携**して、**個別の指導計画を作成**して支援しています。
☆　保護者と担任や通級による指導担当教員が情報交換を密にして**信頼関係**を築いてきました。

○　学級担任は通級による指導担当教員と連携して、１年生のときより個別の指導計画を作成し、校内で継続して支援をしています。
○　年度始めに校内委員会で検討し、学期ごとに保護者と話し合い、評価や見直しを行っています。
○　保護者との日常的な連携は、担任がＣさんの学校での様子を丁寧に伝えるようにしたり、通級による指導担当教員がメールを使って通級による指導の様子を伝えたりしています。これにより、保護者の悩みに答えながら、信頼関係を築いていきました。

個別の教育支援計画の作成に向けて

☆　担任と通級による指導担当教員は**医療機関との連携**や**中学校への引継ぎの必要性**を感じ、個別の教育支援計画の作成について、**コーディネーターに相談**しました。

☆　研修会等で個別の教育支援計画や個別の指導計画について説明をして、**校内の教職員の理解**を図りました。

☆　Ｃさんの保護者に対して、個別の教育支援計画や中学校への引継ぎについて説明し、作成の同意を得ることができました。

○　担任は通級による指導担当教員とＣさんの支援について話をする中で、医療機関との連携や、中学校への引継ぎの必要性を感じました。また、個別の教育支援計画の作成が必要ではないかと考え、コーディネーターに相談しました。

○　コーディネーターは校内の教職員の理解を図るために、研修会や職員会で個別の教育支援計画の趣旨と必要性、個別の指導計画との違い、について説明しました。

○　担任とコーディネーターは、Ｃさんの保護者と毎学期末に、個別の指導計画の評価・見直しについて話合いをしていましたので、一学期末の話合いのときに、コーディネーターから関係者・関係機関が連携して支援していくことの大切さを伝え、個別の教育支援計画の作成や中学校への引継ぎについて説明をしました。

○　保護者は、中学校への進学について不安に思っており、家庭での話合いの後、作成の同意を得ることができました。

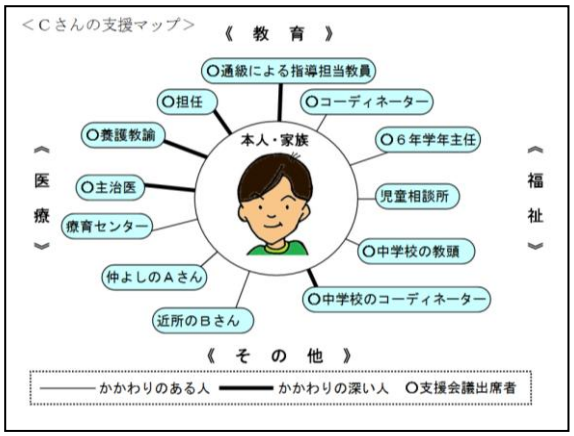
２．個別の教育支援計画の作成

個別の教育支援計画(案)の作成

☆　本人と保護者の願い等を把握したり、保護者と話し合いながら関係者・関係機関についてまとめた**支援マップを作成**したりしました。

☆　関係者・関係機関より情報収集を行いました。

☆　担任と通級による指導担当教員、コーディネーターは、**保護者と話し合い**、個別の教育支援計画（案）を作成し、**校内委員会**で検討しました。



1　Ｃさんと保護者の願いと希望を把握しました。

Ｃさん

友達と仲よくしたい。

落ち着いて行動してほしい。友達と仲よくしてほしい。

保護者

2　コーディネーターは、Ｃさんが関わる関係者・関係機関について保護者と話し合い、支援マップを作成しました。

教育センターの「手引（試案)」を参考に、支援マップを作成しました。

3　担任とコーディネーターが各関係機関と連絡を取るなどして、Ｃさんの支援状況について情報収集をしました。

4　担任と通級による指導担当教員、コーディネーターが保護者と話し合い、個別の教育支援計画（案）を作成しました。

5　校内委員会で個別の教育支援計画（案）について検討し、支援会議に提案することにしました。

ポイント：支援マップを作成することで、対象児がどのような人と関わりを持ち、支援を受けているのかを把握することができます。

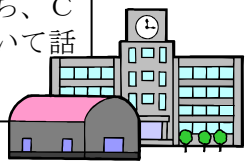
支援会議①の開催前

☆　**外部の関係者の予定に合わせて**支援会議の開催日を決めました。

☆　中学校への引継ぎを考え、**中学校のコーディネーターに、Ｃさんの様子を見てもらい、保護者と話す時間を取る**ようにしました。

○　Ｃさんに対する、校外の支援の中心は主治医でした。そこで、主治医や中学校のコーディネーターの都合を聞いて、支援会議の日を設定しました。

○　支援会議までに、中学校のコーディネーターに、Ｃさんの授業や休み時間の様子を見てもらい、支援の実状を理解してもらいました。また、放課後、保護者と担任、通級による指導担当教員及びコーディネーターで話し合う時間を持ち、Ｃさんの現状や中学校入学に向けた取組について話し合いました。



支援会議①の開催・開催後

☆　引継ぎを考え、**中学校のコーディネーター**にも参加してもらいました。

☆　支援会議では、各関係機関から支援の状況を報告してもらい、個別の教育支援計画（案）を基に目標等について話し合い、**個別の教育支援計画を作成**しました。

☆　次回の支援会議を年度末に開催し、評価を行い、中学校へ引き継ぐこととしました。

○　中学校への引継ぎを考え、中学校のコーディネーターにも支援会議に参加してもらいました。

○　支援会議では、担任や保護者が学校や家庭での様子について説明するとともに、医療機関から支援の状況を報告してもらいました。

○　個別の教育支援計画（案）を基に、目標や支援内容を話し合い、学校、家庭、医療機関において支援の役割分担をしました。主治医からは、情緒の安定を図ることについて、家庭や学校に助言を行うことや、効果をみながら投薬の量等を調整していくことについて説明がありました。

○　年度末に次回の支援会議を開催し、評価をして、中学校へ引き継ぐことを確認しました。

○　個人情報の取扱いについて確認しました。学校が原本を保管し、保護者と関係機関が写しを保管するようにしました。

<支援会議①の参加者>

・校内関係者(教頭、６年学年主任、養護教諭、担任、通級による指導担当教員、コーディネーター)
・保護者
・**主治医**
・**中学校のコーディネーター**

支援会議②の開催

☆　**年度末に**、関係者が集まり、支援会議を開催し、評価を行いました。

☆　円滑な**中学校への引継ぎ**のために、中学校のコーディネーターに加え、教頭に参加してもらいました。

☆　支援会議では、各関係機関から支援後の状況と課題を報告してもらい、個別の教育支援計画の**評価**と**見直し**を行いました。

○　Ｃさんの校内関係者、主治医、保護者及び中学校のコーディネーター、教頭が出席して支援会議を開催しました。

○　学校や家庭、関係機関での支援と結果、今後の課題について報告を行い、支援内容等について評価と見直しを行いました。

○　その際に、保護者からは中学校進学に向け心配していること、主治医からは中学校で配慮してほしいことを、中学校に伝えました。中学校のコーディネーターからは、Ｃさんの支援方法について質問をするなど、お互いに情報交換を行いました。

<支援会議②の参加者>

・校内関係者(**校長**、教頭、６年学年主任、養護教諭、担任、通級による指導担当教員、コーディネーター)
・保護者
・主治医
・**中学校の教頭**
・中学校のコーディネーター

３．個別の教育支援計画の活用

中学校への引継ぎ

☆　春休みに、保護者、担任、通級による指導担当教員、コーディネーターが中学校に出向いて、引継ぎを行いました。
☆　その際、**個別の教育支援計画**と**個別の指導計画**を中学校へ**引継ぎ**ました。
☆　入学前に、Ｃさんと保護者が中学校に行き、**校舎見学**をしたり、**入学式の練習**をしたりしました。

○　春休みに、保護者、担任、通級による指導担当教員、コーディネーターが中学校に出向いて、引継ぎを行いました。
○　その際に個別の教育支援計画や個別の指導計画を基に、中学校での支援について話合いを行いました。また、Ｃさんと保護者が、入学前に中学校に行き、見学等をすることが話し合われました。
○　日程の調整を行い、後日、校舎内を見学したり、入学式の流れを確認して練習をしたりしました。

留意点：引継ぎの基本的な対応については、県教育委員会作成の「特別な支援を必要とする子どもへの理解と支援―改訂版―」に示されています。個別の教育支援計画は、原則として原本を保護者に渡し、進学先に引き継ぎます。個別の指導計画は、保護者の承諾を得て、写しを進学先に送付します。

支援会議を開催し、個別の教育支援計画を作成することで、主治医と学校が連携しながら支援することができました。中学校のコーディネーター等にＣさんの様子を見てもらったり、支援会議に参加してもらったりしました。また、保護者と話合いの機会を持つことで、中学校への引継ぎを円滑に行うことができました。小学校卒業後も中学校の授業を参観させてもらったり、支援会議に参加させてもらったりするなどして、中学校と連携をして支援をしていければと思っています。

Columu

「インシデント・プロセス法」

児童の支援を考えるために、事例検討会は重要なのは分かっているけど・・・資料作成は大変だし、何を言われるか分からないし、・・・などの声が聞こえることも。
そのような解決策として考えられたのが**インシデント・プロセス法**です。

利点
1. 話題提供者に負担がない（資料なし、またはＡ４、１枚程度）
2. 参加者全員が主体的に参加できる
3. その場限りにならず、翌日からの指導に直結しやすい

＜手順＞

ステップ1. 事例提供者がインシデント（出来事）を発表し、参加者は内容を把握します。
ステップ2. 参加者は事例提供者に問題解決方法を考える上で必要だと思われることについて質問をし情報収集を行います。事例提供者は質問されたことにのみ答えます。参加者は簡潔に、また具体的に質問をし、得た情報を整理していきます。
ステップ3. グループに分かれ、司会者と記録者を決め、自分ならどのように支援を行うかを記入し、話し合います。
ステップ4. グループで話し合った具体的な支援方法について発表します。
ステップ5. 事例提供者に感想や実践できそうなことを言ってもらいます。最後に参加者全員が「事例検討のアンケート」を記入して終わりにします。

＜注意点＞
1. 事例提供者を非難したり、努力不足を指摘したりすることは絶対禁止
2. 事例提供者は事実だけを答え、考えや想いを述べる必要はない
3. タイムスケジュールを作り厳守する

※　参考文献　独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（編著）「学校コンサルテーションを進めるためのガイドブック」